神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

Exploring a reality of Kappa - what lies beneath sumo-loving of Kappa-

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2015-12-22
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 竹村, 匡弥, TAKEMURA, Masaya
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2015

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

河童のリアリティを求めて
―「河童の相撲好き」その底流にあるのはなにか―

竹村　匡弥

はじめに

明治期に妖怪博士と呼ばれた人物がいる。井上円了という哲学者である。彼はのちに東洋大学となる哲学館を設立する。ここで井上は妖怪学という科目を教えることになる。妖怪博士といわれた人であるから、当然ながらいろんな妖怪やその現象について詳細に分析している。妖怪に詳しいと言うことになると、妖怪に対してその存在を好意的に観る立場なのだろうと、つい考えてしまう。ところが井上は、妖怪の存在や迷信が人々を真理から遠ざけるものであるとし、妖怪という怪異現象を科学的に解明することが大切であるという立場から妖怪の研究をした人なのである。結果として彼は妖怪に詳しくなり『妖怪学』『妖怪学講義』などの著作を残している。

明治に入り、「近代」を接ぎ木した日本の課題として井上が取り上げたのが、迷信とされるような民間の様々な怪異現象の類いであった。井上はそれを絶滅しようと考えたのだ。しかしながら、その成果があったとは考えにくい。井上の後、妖怪の研究者をあげるのであれば、柳田国男がいる。柳田は井上を批判するように、「迷信」という言葉を避け、「民間信仰」という言葉を使用する。妖怪や怪異現象を信ずる心性に潜むものを研究対象としている。筆者はそれを「リアリティ」と呼びたい。同じような現象や体験であっても、それが違う時と場所、あるいは普段とは違う心身の状態の時に起った場合、私たちは、科学的には解明できそうにない因果関係を感じるときがある。科学的に説明できないからと言って、それを信用しない、というのはある種の詭弁ではないかと考える。身体に刻み込まれたその感触はぬぐい去られることなく残っているのである。科学的には証明できそうにない妖怪であっても、その現象にリアリティを感じ、身体に刻み込み、それによって伝承されてきたさまざまな習俗（あるいは禁忌）があるのは事実なのである。筆者は、河童という妖怪と、それにまつわる習俗を研究対象にすることで、河童のリアリティを探っていきたいと考えている。

河童には多くの性分がある。牛馬を水中に引き込む。富を授けたり、秘薬を伝授したりする。また、キュウリを好み、鉄や仏教などを嫌う。そして河童は相撲を取りたがる。人と相撲を取っては水中に引き込み尻子玉を抜いて殺す。尻子玉とは肛門にあると想像された玉のことである。無事に河童の

難から逃れた場合でも気が狂れることがあったとされる。また、火を乞う性分もある。河童について伝承されてきた大きな性格としては以上が挙げられる。筆者は河童の相撲好きに焦点を当て、河童が相撲を好むのはなぜかという問いを設定し、それを研究してきたが、本稿では河童の性分を分析することで、「歴史」では語られないその底流に流れているものがなにであったのか、あるいは、すでに私たちの記憶の断片からも消え去り、語られることもなくなった河童の正体に迫ってみたい。

Ⅰ　河童と相撲の呪力

1．河童の相撲好きについて

河童は相撲を好むという。川辺を歩いていると薄暗いところから相撲をとろう、とろうと近づいてくるモノがある。子供ぐらいの大きさで、頭には水の入ったお皿が載っている。すでにこのときには、相撲をとろうと誘われた人間は、この怪異に取り付かれ、もう扉の向こう側にいるのであろう。当然、その人物以外の他の人には見えることはない。相撲をとろうと誘われるのは、大概は力持ちか子供である。相撲を誘っているモノは、子供のような大きさだから、勝てると見込んで相撲をとることになる。しかし、この子供のようにみえるモノはやたらと強いのだ。さては河童の仕業かと気づくことになる。やっとの思いで逃げ延びた人は、その後、高熱を出したり、気がふれたりすることになる。負ければ川に引きずり込まれるのだろう。このような伝承が全国各地で伝えられている。

河童は相撲を好むのだが、その理由として、好物である人の「尻子玉」を欲しがるからだといわれている。つまり、相撲をとって河に引きずり込み、尻から「尻子玉」を吸い取るという訳なのだが、どうもそれだけが理由のようでもない。ただ、ひたすらに相撲をとりたがるということもあるようだ。子どもと相撲をとったという伝承では、ただ相撲をとりたがるだけだと考えられるものもある。

ある日、子どもの帰りがずいぶんと遅い。ようやく帰ってきた子どもにその訳を聞くと、川辺で相撲をとっていたという。明日も行くのだという。訝しく思った家の者たちが、翌朝、仏飯を食べさせた後出掛けさせた。すると、じきに帰ってきたのだ。今日は、お前の目ん玉から光が出ているので、止めておこうと言われたという。

この伝承は、河童が仏教を嫌っているという逸話に分類されるのであろうが、尻子玉欲しさのためだけに相撲をとるということであるならば、この子どもは初日に被害にあっていたであろうし、そもそも相撲をとらなくても水の妖怪であればいくらでも人を襲うことが可能なはずである。やはり河童は相撲が大好きなのだ。しかも、河童の相撲相手に選ばれるのは力持ちと子どもが多い。

河童に取り付かれるのが力持ちや子供である場合が多いのは、「力持ち」や「子ども」という存在がモノの怪の世界に通じる存在であったことを意味しているのではないか。力持ちを「力士」、子どもを「童」と言い換えてみよう。日本では、両者は古来より神聖視されていたと考えられる。「童」について言及する網野善彦は、牛飼が童形である理由につい

て思いつきとしながらも重大なヒントを与えてくれている。獰猛だと考えられていた牛を統御できるのは、童の持つ呪的な力に対する期待の顕われではないかとしている[1]。また、「力士」については稲垣正浩が、その異形性について論じる中で、ふつうの人と神との中間にいる存在が「力士」であるとし、ふつうの人から尊崇を受けているのだとする[2]。あの大きな身体とすごい力はまさに異形の人なのである。

河童が相撲をとりたがった両者はともに呪力を持った、神と人の世界の境界を自由に行き来できる異形のものであったと考えられるだろう。つまり、好物の尻子玉が欲しかったというよりは、河童は呪力を帯びた者たちと相撲をとりたかったのだ。このことが意味していることは何なのであろう。

2．水の精霊は相撲を好む

一般的に相撲とは二人が組み合う格闘技の一種として考えられているが、民俗として現在に伝承され、もしくは現存しないまでも伝承として記録に残る祭祀相撲には多種多様な様相がある。子供相撲、女相撲、ひとり相撲などがそれである。また、決着のつけ方をもって個別の名称のあるものとして泣き相撲、どろんこ相撲などがある。

田の精霊、水の精霊との直接的な関係を論じられることが多いのが、ひとり相撲とどろんこ相撲である。愛媛県越智郡大三島町の大山祇神社では旧暦五月五日の御田植祭と旧暦九月九日の抜穂祭にひとり相撲が行われる。名称のごとくひとりで相撲を行い、「二勝一敗」で精霊の勝ちとなる。これは客観的観察の上では、ただ単に一人で暴れているように見える。見方を変えれば舞っているようにも見える。和歌森太郎のいう河童との相撲による「相舞（すまう）」という表現が可能に思われる。もしくは「素舞」という表現が可能に思われる。精霊に勝ってもらって、勝利を献上することにより豊穣の約束を取り付ける。また、見方を変えれば柳田が言うように「気の狂れた」状態とも考えられる。折口信夫のいう「神がかり」でもある。これは一種のトランス状態であり、そのことによって精霊との交信が可能になる。それがこの場合の祈願の方法であり「祈り」であった。

奈良県桜井市江包の素盞嗚神社と同市大西の御綱神社では旧暦正月十日の「お綱祭」の際にどろんこ相撲が行われている。これは勝敗を競うというものではなく、田んぼの中で相撲を取り、とにかく泥がたくさんつくことが豊穣に恵まれるというものである。精霊に相撲を奉納する訳だが、泥という以上それは土と水の交わったものであり足場はとても悪く、組み合おうとしては転び、組合ったとしても足場のおぼつかない「足踏み」をしているだけ、そしてバランスをくずしついには転んで泥（土）がつく。

白川静によれば「土」は「社」の初文であるとし、「土」に聖なる「水」をそそぐことによって地霊を呼び起こし、それを「興」とする。その儀礼は「興舞」として地霊に聖水（御神酒）をそぞきながら舞い、囃し立てることであるとする。また、足場のおぼつかない動きは、千鳥足のような踏み方として説明される「反閇」と見ることもできる。あるいは、「反閇」へと派生する以前の「禹歩」として見ることもできる。「反閇」、あるいは「禹歩」は道教的呪術である。

禹という人物は中国最古の王朝とされる夏王朝の始祖とされ、氾濫する黄河の治水に活躍したとされる。禹は治水工事に熱心に取り組み、そのことで足が不自由になったといわれている。禹歩とは足が不自由であった禹の歩みのしぐさに由来する。それは洪水説話に起源を持ち、古代より中国の人々によって行われていた魔よけや清め、鎮魂の呪術としてあった。つまり、反閇や禹歩のような足踏みが呪術であった訳である。精霊と相撲をとっているひとり相撲は、一人で足踏みをしているように見えてしまう。紛いなくこれそのものが呪術であるといえる。相撲そのものが呪術であったのだ。

相撲という呪術を足踏みという視点から、「禹歩」という所作にまで遡っていくと、洪水や治水との関係が浮上してくる。禹は治水に活躍した人物とされており、河や雨、つまり水を支配する精霊との交信が可能な呪力を持ち合わせていたのであろう。その呪法が禹歩であったと考えられるのだ。

大山祇神社でのひとり相撲も、桜井市江包のどろんこ相撲も稲の豊作を祈願する行事として行われている。豊作を祈るときの一番の要所はやはり「水」に関することであろう。雨が降りすぎても駄目、降らなかっても駄目、適度に降らなければならない。その気まぐれな雨によって、稲は枯れ、一気に死活問題となる。人為が及ぶところでの技術は改良を重ね、灌漑治水の技術もある程度の安定を確保できていたとしても、やはり雨が降らなければいずれは枯渇する。このどうしようもできないことに対して人々はどのように折り合いをつけてきたのか。それが全身全霊を賭けた「祈り」であったと思われる。具体的には雨や河川を支配するカミや精霊と交信し、なんとかよい雨がふるように約束しようとする。交信し約束を取り付けるための方法が禹歩であったと考えられる。精霊との交信は禹歩という呪術でもって開かれる。精霊は禹歩によって目覚め、人の祈りが届くと考えられていた。精霊との相撲は異界との交信そのものであると考えられる。足踏みという視点で繋がる禹歩と相撲を同一種のものだとみなせば、精霊は相撲が好きなのだと、そのように人が思い込むことを容易に想定できる。

3．牛の呪力について

農耕民にとって雨、河、つまり水の管理は重要事である。それは自然現象であり、大雨で洪水になったり、長期間雨が降らずに旱魃になったり、はたまたまったく予期できぬ川の氾濫があったりもする。雨乞い（降雨、止雨）に関する民俗資料は数多く存在する。ここでは雨乞いの習俗に殺牛馬が関係するものだけをみておきたい。それは河童駒引に繋がることを想定してのことだ。

佐伯有清によれば、福島県南会津郡大戸町、同郡長江村、静岡県志太郡西益津村、兵庫県加東郡の村々、広島県双三郡八幡では雨乞いに牛の頭を沼、池、滝に投げ込んだとしている[3]。牛が農耕として本格的に使役されるためには、鉄製の犁（すき）が必要になる。その犁先は五世紀頃に朝鮮から日本に伝わったのであろうとされているが、民間に広まるのはかなりの年月が必要であったと考えられる。『続日本紀』天平十三年（七四一）二月七日の記述から推察されるのは、少なくとも八世紀には、「百姓」と記される民衆において牛馬の使役は一般

的であり、農耕民においても牛や馬の使役は行われていたと考えられる。牛の使役は農耕機械が誕生する昭和初期まで続けられていた。農耕民にとって牛馬はかなり貴重な存在であったと考えられるが、水の管理能力を越えて迫る自然現象の脅威に対しては、貴重な牛馬を犠牲として献ずる必要があり、それほどに水神と牛馬の繋がりは強く深いものとして信仰されていたと言わざるをえない。農耕における牛の使役に人々は尋常ならざる力の存在をみていたのではないか。犂の開発がそれまでの農耕を変化させたのはいうまでもないだろう。しかし、牛が怪力であるということ、そして単に大きな力という意味で留まらない力の存在を牛に認めていたのではないだろうか。牛が耕すことによって、作物が育つという不思議に、牛の持つ「力」をみていたのではないか。

『日本書紀』の皇極元年七月からの条には次のような記述がある。

二十五日、群臣が、「村々の祝部の教えに従って、牛馬を殺して諸社の神に祈ったり、あるいは市を別の場所に移したり、また河の神に祈ったりしたが、雨乞いの効き目はなかった」と語り合うと、蘇我大臣は、「寺々で大乗教典を転読しよう。仏の教えに従い、過ちを改めて、雨乞いしよう」といった。

（中略）

八月一日、天皇は南淵の川上においでになり、跪いて四方を拝し、天を仰いで祈られると、雷鳴がして大雨が降った。雨は五日間続いて、天下は等しくうるおった。国中の百姓は皆喜んで、「この上もない徳をお持ちの天皇である」といった。(4)

一連の記述の意図は明白である。一つは、雨乞いがそれまでの方法を否定し仏教によるものへと変わろうとしたこと。しかし、それでも雨が降らず、結局は皇極天皇自らの雨乞いによって大雨が降ったということを強調している。もう一つが、仏教方式の雨乞いを勧める蘇我氏を貶め、それよりもやはり天皇の徳が勝っているのだということを強調するためである。皇極紀ではこれらの記述に続き、蘇我氏滅亡のストーリーが記述されている。蘇我氏は力を持っているが天皇の徳には敵わないのだということを描いている。

ここでは前者について考察したい。この史料は古代日本における殺牛馬習俗を考察する際注目すべきものとなる。「牛馬を殺して諸社の神に祈ったり」、「市を別の場所に移したり」、「河の神に祈ったり」することが、雨乞いのためであり、「村々の祝部の教えに従って」行っていると記述されている。このことは、殺牛馬の習俗が民間の習俗としての広がりをもっていたことを示唆するのだ。

『続日本紀』天平十三年（七四一）二月七日の詔では、

「詔して曰く、馬牛は人に代わりて、勤労して人に養はる、茲に因りて、先に明制ありて、屠殺することを許さず、今、聞く、国郡未だ禁止すること能わず、百姓猶屠殺することあり、宜しく犯すことある者は、蔭贖を問はず、先ず杖一百を決し、然る後に罪に科すべし、又聞く、国郡司ら公事によるにあらずして、人を聚めて田猟し、民の産業を妨げ、損害実に多し、自今以後、宜しく禁断せしむべし、更に犯すことある者は、必ず重科に擬

せよ。」[5]と記述される。

この詔の内容では、牛馬は人に代わって勤労するものだから、屠殺することを禁じている。しかし、それにもかかわらず未だ禁止できていないという内容が書かれている。

また、『古語拾遺』[6]には、神代のこととして大地主神（おほなぬしのかみ）と御歳神（みとしのかみ）の伝承が記述されている。概要は次のようになる。大地主神が農耕始めの日に、牛の肉を耕作人たちに食べさせた。御歳神の子がその田に出向き、饗応物に唾を吐きかけて帰り、その旨を御歳神に伝えた。怒った御歳神が蝗（いなご）を田に放ち枯れさせた。大地主神が占いをさせたところ、御歳神の祟りだと解り、白猪、白馬、白鶏を献じて謝罪した。御歳神はこれを受け入れて、蝗の払う方法を教え、それでも無理であれば、牛の肉を田の溝口に置き、男茎の形を作れとされた。その通りにすると、年穀も豊かに実ったと記されている。

御歳神の怒りは、まず、田に供えなければならない牛の肉を先に耕作人が食べたところにある。ここでは牛を殺しその肉を食べたり、田に供える習俗があったことが確認出来る。掘り下げて見ていくと、牛の肉を畦に置き、男茎を作るところは、田んぼそのものを女性性器と見立て、牛の肉で男性性器を作り、その和合をもって豊穣を祈っている。田植え時、田んぼには水を入れ、牛は田んぼの土を耕してかき混ぜるのである。それを和合と見立てて、豊穣を祈っている。やはり、牛は単に怪力な生き物だと解されていたのではなく、稲を豊かに実らせる呪力を兼ね備えていたと考えるべきであろう。

上記した三つの史料では、殺牛馬習俗が民間に広がっていたことを確認することが出来た。そして、それは雨乞いと豊穣の祈りのためであった。雨乞いとしての牛を殺す習俗があったことをみてきた。では馬に関してはどうなのか。雨乞いと馬については、祈雨の際、馬を奉じた事例が『続日本紀』『日本後紀』『続日本後紀』に数多く記されている。時代が下るにつれて丹生川上神社への奉献馬が多くなってくるが、『続日本紀』に祈雨の記述がある最初の文武二年（六九八）の項では、「四月廿九日　奉馬于芳野水分峯神。祈雨也。」「五月五日　遣使于京畿。祈雨於名山大川。」「六月廿八日　奉馬于諸社祈雨也。」とあり、『続日本紀』に記載される祈雨の祭祀の当初は、必ずしも奉献馬があった訳ではなく、特定の神に限られていた訳でもない。祈雨に際して馬を奉献する事例は確認できる。

祈雨もしくは止雨の祭祀と馬の関係では、絵馬の前身とも考えられている土馬[7]がある。土馬は、近畿地方を中心に飛鳥時代から平安時代の遺跡で、溝や川辺、井戸底などから出土し、祈雨もしくは止雨の祭祀の時に水の神に捧げ、また、疫病神や祟り神を封じるための祭祀に使われたものだと考えられている。また、『続日本紀』慶雲三年（七〇六）には、「是年。天下諸國疫疾。百姓多死。始作土牛大儺。」と記述があり、「土牛」によっても、疫病を追い払う儀式を行っている。

4．祟り神と殺牛馬習俗

祟り神と殺牛馬習俗については、参考になる一つの史料がある。『日本霊異記』[8]中巻第五話に、「異国の神の祟りから免れるために牛を殺して祭り、また一方で放生の善を修め

て、この世で善悪両方の報いを受けた物語」が記載されている。要約すると次のようになる。

摂津国東生郡撫凹村の富豪の家長が、漢神の祟りにあったので、七年間の期限を立ててその神を祭り、毎年一頭で七頭の牛を殺し、七年後祭りを終えた。しかし、急に病になり、一向によくならなかった。そこで、家長は、こんな重病に罹ったのは牛を殺した殺生の罪によるものだろうとして戒律を守り多くの放生の善行を行った。それから七年後、病はよくならず、いよいよ臨終の時を迎えた。妻子に、死んだら遺骸を焼かず九日間そのままにしておきなさいといった。死んで九日後、家長は生き返り、冥界での出来事を話した。閻魔王のもとで、七人の牛頭人身のものたちと、千万余人のものたちが議論した。千万余人のものたちは、祟っていた悪神を祭ったが故に牛を殺してしまったと訴えた。最後に、閻魔王は数の多い方の訴えをとったので私は生き返ることが出来たのだ、と。この家長は、閻魔王のもとから生きて返り、ますます仏法へ帰依した。

ここでは、祟り神としての漢神の存在が語られ、その祟り神を祭るために殺牛が行われていたことが記述されている。佐伯有清は、殺牛の習俗には、雨乞いによるものと祟り神によるものとがあると大別し、前者を日本固有の習俗とし、後者を大陸から渡来した習俗だとしている[9]。しかし、下出積與は二つに大別するのは認めながら、『日本書紀』の皇極元年七月の条の記事にみられる「市を移す」「河神に祈る」という習俗が大陸から伝わったものであることを示し、殺牛馬の信仰と並記されてある点に注意することから、雨乞いによる殺牛の習俗も大陸から伝わったものだとしている[10]。また、上田正昭は、殺牛馬の習俗について、アジアに広く祈雨止雨の祈りの際に牛馬の供犠のあること、それらは中国大陸や朝鮮半島からもたらされたものであり、また、それらがけっして渡来集団のみの習俗ではなく、諸国に広がり、独自の変容を遂げたことを古文献などの史料および民俗に残る資料によって示している[11]。

以上のように、殺牛馬の習俗には雨乞いに関わるものと、祟り神に関わるものとがある。そして、これらの習俗の由来について、現在のところ筆者は、両者ともに中国大陸や朝鮮半島からもたらされたものだと考えている。

河童は妖怪であり、やはり精霊でもカミでもない。しかし、柳田国男によれば河童は水神の零落したものであり、河童が牛馬を水中に引き込むのは、水神が牛馬を供犠として欲するためだとしている[12]。また、石田英一郎は『河童駒引考』において、柳田の見解をユーラシア大陸にまで広げ、同様の多くの神話、伝説、民俗的史料をもとに支持する。少なくとも農耕民にとっては水（河神）と牛の関係が馬よりも年代的に早かったとして、牛と馬とを比較して前に牛の演じた役割に馬が参加するか、あるいはこれに代わるというような現象も[13]あったとしている。河童駒引という名称で呼ばれる事になった河童の行為は、水神に対する牛馬の供犠であり、馬に限定される事ではなく、牛もその対象になっていたと考えられる。

しかし、水神が零落して河童になったということであれば、水神が水神としての立場を維持出来ずに、何ゆえ河童に

零落してしまったのかという疑問が残る。農耕においては昭和初期まで牛が使役されてきたので、そのころまで殺牛馬の習俗は行われていた。ましてや、自然現象である降雨による洪水や旱魃などは、現代に至っても被害がある。つまり、稲作にとって極めて重大な習俗の信仰対象である水神がなにゆえ零落することになったのか河童を水神の零落したものとして考える場合、零落することそのものが河童起源譚になるのではないか。

Ⅱ 河童はどこにいたのか

1．河童起源譚について

河童がどのようにして生まれたのかという話が各地に伝えられている。それらをまとめるとおおよそ以下の三つのパターンに分けられる[14]。一つ目は河童が藁人形や木屑から変化したとする話、二つ目は中国から海を渡って九州にやってきたという話、三つ目は牛頭天王（ごずてんのう）の子孫であるという話である。

一つ目の河童が藁人形や木屑から変化したとする話は人形化生説といわれており、社寺などの建立縁起となっているのが特徴で、社寺建立の期日が迫り、困った番匠（大工）は人手不足を補うためにたくさんの藁人形を作り、それに命を吹き込み手伝わせ、わずかの間に完成させた。用済みになったその者たちはこれからどうすればいいかと尋ねるが、人の尻でも取って食べろと言われて川に捨てられた。これが河童が尻子玉を取る訳である、というのが話のあらすじである。この起源譚は全国的な広がりで見受けられ、地方によって多くのバリエーションがある。代表的な伝承として、後に考察する春日大社（奈良県奈良市）の建立縁起があり、『北肥戦誌（ほっぴせんし）』に「渋江家由来の事」としてその記述がある。

二つ目の中国から海を渡って九州にやってきたという話は大陸渡来説といわれている。昔、中国の黄河に住んでいた河童のある一族が、海を渡り九州の熊本県南部球磨川に住み着き、繁殖して九千匹になった。九千坊と称する族長はとても乱暴であった。肥後の藩主加藤清正は乱暴を制圧するために、九州一円から河童が苦手とする猿を集め、河童を攻めたてて降参させた、とする話である。加藤清正は戦国時代の勇猛な武将の一人であったが、肥後における治水灌漑においては後世に残る事業を残した人物であり、築城（建築）や治水工事にも特筆すべき才能があった。

三つ目の牛頭天王御子説とは、河童を牛頭天王の子孫とする話である。姫路の広峯神社や、京都の八坂神社は現在、主祭神としてスサノオを祀っているが、元は牛頭天王であり、牛頭天王とは祇園社の祭神である。牛頭天王は疫病を司る神であり、武塔（むとう）神と同一と考えられている。疫病を避ける逸話として、武塔神と蘇民将来（そみんしょうらい）兄弟の話がある。訪れた疫神・武塔神を親切に迎え入れた兄は疫病を免れることができたという話である。河童を牛頭天王の子とするのであれば、武塔神、牛頭天王、スサナオ、河童は同系にあることになる。また、京都の祇園祭において氏子は祭りの前にキュウリを食べない、あるいは水泳ぎをしないという禁忌が存在している。

河童の大好物がキュウリであるという性分や水難事故と関わりを持つものと考えられる。

以上、簡単にではあるが三つの起源譚を紹介した。ここには直接的に河童が零落したことに関連付けられるモチーフはない。しかし、前述した禹歩と関連する要素、あるいは殺牛馬習俗と関連する要素を見つけることは可能である。三つ目の牛頭天皇御子説は殺牛馬習俗の祟り神が河童と同系列の中にあると見ることが可能である。もとより史料と民俗資料の厳密な整合性を問うことは無駄であり、意味のあることでもない。ここで注目したいのは、前述した殺牛馬習俗は牛の頭を滝や川に投げ入れることであったことだ。牛の頭で牛頭天王なのだ。かつて和歌山県西牟婁地方牛屋谷では同様の習俗があり、牛の頭をお供えする祠は牛頭天王が祀られていたという[15]。二つ目の大陸渡来説と関連付けられるのが洪水治水神であった禹である。禹は黄河の治水事業に活躍した人物であった。黄河から逃げ延びた河童たちが、治水工事の名人でもあった加藤清正によって治められている。

2．河童が人形から誕生したということ

河童が水神の零落したものであることを追っていけるのが一つ目の人形化生説にある。人形化生説の代表例として挙げた春日大社建立縁起が「渋江家由来の事」という文書に記載されている。ここにはひょうすべを河童とする記述がある。以下、概要を記す。

「潮見城主渋江家の先祖は、敏達天皇の子孫左大臣橘諸兄である。その孫島田丸、兵部大輔として朝廷に仕え奉る。春日の社常陸国鹿島より、三笠山へ移らせ給う時、この島田丸が匠の奉行を勤めた。内匠頭が九十九の人形を作って秘法を行うと、火や風が人形を童の形に変化させた。それらはあるときは水底へ、あるときは山上へと赴き精力を尽くして働いた。御社造営は予定よりも早く完成した。造営のあと、人形を川中に捨てたが、それらはそれまでと同じように動き、人馬家畜に被害が及んだ。今、河童というのはそれらのことである。急遽、島田丸が河や水辺に触れ回ると、それらの禍いはなくなった。それらを兵主部（ひょうすべ）という。兵部（ひょうぶ）が主であるという意味である。このことから兵主部は橘氏の眷属であるという。」[16]

ここに記されているのは、当然ながら渋江家の由来のことなのだが、不思議なことに渋江家の由来については冒頭に橘諸兄を祖先とすると記すだけで、本旨は河童の人形化生説に加えて河童の別称として兵主部（ひょうすべ）の名前が出来上がった理由と、その兵主部が橘一族の眷属であることが記されているのである。つまり橘氏を祖先とする渋江家が河童を統御することになる由縁が記されているとみてよい。

渋江家が祖先とする橘諸兄（六八四～七五七）は奈良時代に藤原四兄弟の相次ぐ死去（七三七）の後、右大臣左大臣となった人物である。しかし藤原仲麻呂が勢力をのばすと隠居をする。その子、橘奈良麻呂（七二一～七五七）は、藤原仲麻呂の専横を嫌い、謀反を計画（橘奈良麻呂の乱）するが、これが発覚し処刑されているとする。

もう一つ、渋江家には河童に関わる重要な伝承がある。河

童除けの呪文である。

「ひょうすべよ／約束せしを忘るなよ／川立おのが／あとはすがわら」[17]

川で河童の難を避けるための呪文である。この呪文は、潮見神社（佐賀県武雄市）に代々伝わる呪文で、潮見神社は橘諸兄、橘奈良麻呂、橘島田麻呂、橘公業など橘一族を祭神として祀る。この神社には「河童の証文石」という石が存在しており、証文石に関する逸話の中で次のような約束が交わされている。この石に花の咲く時があれば、お前たち（河童）に人一人獲ることを許すが、それまでは人を襲い危害を加えてはいけないというのである。この呪文が潮見神社に伝わるものである以上、呪文に見られる「約束」が証文石に関することと考えて問題ないであろう。

呪文では「約束を忘れるな」に続いて、「川立ちおのが/あとはすがわら」と続く。「川に入る人は菅原氏の末裔だぞ」ということになり、この一言が呪文の決め文句となって、河童は悪さができなくなる。河童がこの呪文によって手出しができなくなる理由は、川に入る人間が菅原の家系であることなのである。ということはどういうことなのか、河童と菅原氏とになんらかの関係がなくてはこの呪文は呪文ではなくなる。

3．ひょうすべと菅原氏

四世紀頃から続いてきた古墳時代は七世紀半ば頃に終末を迎える。それまで葬送に携わってきた土師（はじ）氏は、八世紀後半になって菅原氏、秋篠氏、大江氏へと改氏する。これが後の菅原氏であり、有名な菅原道真は改氏してから四代目にあたる。また土師氏は野見宿禰を祖先とするので、菅原氏の祖先は野見宿禰ということになる。土師氏が野見宿禰を祖先とするのは、『日本書紀』に野見宿禰が登場する箇所に記述されている。

野見宿禰は『日本書紀』の中で二つの記述に登場している。ともに垂仁天皇の条、相撲起源ともいわれる当麻蹶速との闘いが記される箇所と、もう一つは埴輪起源ともいわれる記述の箇所で、埴輪を考案した人物として記されている。

相撲の起源説話として語られる「野見宿禰と当麻蹶速の捔力」の記事は、七二〇年成立の『日本書紀』十一代垂仁天皇七年七月七日条に記される。概要を以下に記す。

「当麻邑に当麻蹶速という力の強いものがいて、どこかに力の強いものがいれば生死を問わず力比べがしたいといつも人々に語っているのを垂仁天皇がお聞きになり、当麻蹶速と、彼に並ぶ勇士である出雲国の野見宿禰を呼び、彼らに捔力とらせた。腰を砕かれ殺された当麻蹶速の土地を野見宿禰が賜うこととなった。」[18]

野見宿禰と当麻蹶速が相撲をとったとする場所がある。その伝承地は垂仁天皇の宮跡とされる奈良県桜井市纒向・穴師にある。垂仁天皇が二人を呼び寄せて相撲をとらせたとあるのだから、垂仁天皇が遷都した地に相撲の伝承が残るのも納得がいく。その伝承地は現在、野見宿禰を祭神とする相撲神社の境内にあたる。そして、この相撲神社を摂社としているのが、祭神を兵主神とする穴師坐兵主神社である。

ここに兵主が出てくるのである。兵主神とは『史記』にみられる八神の一つであり、兵主とは黄帝と戦ったという古代中国の伝説的存在、蚩尤（しゅう）のことである。蚩尤とは砂を食し武器（鉄）を生み出す伝説上の存在である。武器を生み出す存在であった。兵主と名のつく神社は全国に約50社あり、式内社としては穴師坐兵主神社を含めて約20社ある。それらの多くは但馬地方（兵庫県豊岡市）に集中している。豊岡市には橘（みかん）をお菓子と見立てて、「お菓子の神」を祭神とする中嶋神社がある。祭神はタジマモリ。『日本書紀』では、このタジマモリとは垂仁天皇が不老不死の果物「橘」を取ってくるよう命じた人物である。垂仁天皇の御陵は、現在の奈良県奈良市菅原町の近くにあり、この菅原町は菅原氏の土地であったところだ。また、橘一族の橘姓は橘諸兄の母三千代から始まるが、杯に浮かぶ橘を見てその姓を賜ったとする伝承があり、不老不死の果実として求められた「橘」との関係性も浮かび上がってくる。垂仁天皇とタジマモリは不老不死という道教的思想で繋がっており、その象徴が「橘」なのである。

4．常世の樹「橘」

三千代は「橘」という姓を元明天皇即位と同時期に賜っている。この成り行きについては三千代の最初の夫である美努王との間の長男・葛城王らが、三千代の死後、橘の姓の継承を求めた上表文により確認出来る。

ここで注目したいのは、『紀』における「橘」に関する二つの記述である。垂仁紀九十年の条に、天皇はタジマモリに命じて、常世の国に遣わし「非時（ときじく）の香果（かぐのこのみ）」を求められた。これが橘であると、記されている。そしてもう一つの記述が皇極紀三年の条である。以下、要約を記す。

「富士川のほとりの人、多が虫祭りを勧め、常世の神として祭り、これを祭れば富と長寿が得られると、民を惑わせている。田舎でも都でも盛んに行われ、損益ばかりが増えた。見かねた秦河勝がこれを懲らしめた。この虫は常に橘の木に生じる。この事件を評して次のような歌が流行ったという。「ウヅマサハ、カミトモカミト、キコエクル、トコヨノカミヲ、ウチキタマスモ」。太秦は神の中の神と評される。常世の神を打ち懲らしめたのだから、と。そして、この虫は蚕にとてもよく似ている。」(19)

この記述で印象づけられるのは「常世」の木につく虫をカミとして常世神信仰が流行ったのだが、それが偽りの信仰であったとしているところだ。「橘」が常世の樹であるということを強調して、それを否定しているのである。

この虫祭りを主導しているのが大生部多という人物で、それを懲らしめたのが秦河勝である。秦河勝とは渡来系氏族秦氏を代表する人物で聖徳太子に仕えた人物として有名であ

る。この記述では、秦河勝は少なくとも仏教を信仰する立場として描かれているわけであって、その秦河勝が「常世の神」を偽りの信仰として打ち懲らしめたのである。そして、兵庫県豊岡市にあるいくつかの兵主神社で兵主を祀っているのが大生部であり、その神社を大生部兵主神社という。つまり、橘を否定することで、常世信仰を否定しかつ兵主神を否定していることになる。

5　秦氏と兵主

秦氏に関する記述として『万葉集』（第七巻）に詠まれた歌がある。

「痛足川川波立ちぬ巻目の由槻が嶽に雲居立てるらし」（一〇八七）

「あしひきの山川の瀬の響るなべに弓月が嶽に雲立ち渡る」（一〇八八）

「痛足川」は「あなしがわ」と読み、「巻目」を「まきむく」と読む。「あなし」とは三輪神社で有名な三輪山の北側、先述した奈良県桜井市穴師を指し、この地には穴師坐兵主神社がある。穴師には「痛足川」と推定できる巻向川が流れており、この巻向川の両側に巻向山と龍王山があるが、歌にある「由槻が嶽」「弓月が嶽」は同じで、巻向山にあると考えられている[20]。

『紀』の応神天皇十四年条には、弓月君が百済より渡来したとあり、十六年条には、新羅に渡来を防がれ、加羅に留まっていた「弓月の民」が渡来するとある。加えて、『新撰姓氏録』には「融通王（一に弓月王という）」が、秦始皇帝の末裔で、多くの民を率いて渡来したという記載がある。このことから、秦氏が秦始皇帝を祖とする説がある。また、『古語拾遺』および『新撰姓氏録』にみられる記載から、弓月王が秦氏の祖であるということが通説になっている。この「融通王（弓月王）」と、先の『万葉集』の二首に書かれる「弓月」との繋がりから、秦氏が弓月嶽（現巻向山）周辺にも居住していたと考えられる。そして、穴師坐兵主神社の由緒書きには、現在の社殿は応仁の乱によって焼失した後に建立されたもので、焼失前は「弓月が嶽」にあったとしている。つまり現巻向山（付近）にあったというのだ。これらを合わせると、弓月嶽（現巻向山）を中心にした穴師一帯において、秦氏の奉じていた神が兵主であったと考えられるのだ[21]。となると、矛盾が生じるのだ。秦氏は兵主神を祀る大生部を追討している。千田稔は、このことについて秦河勝と大生部多が同族であり、同族の争いがあったとみている[22]。つまり、秦河勝は常世信仰から仏教へとその信仰が変化したと考えられる。

さて、野見宿禰は『紀』の記述内容から出雲国出身と考えられているが、奈良県桜井市にも出雲の地名があり、そこには野

見宿禰塚跡がある。巻向山から三輪山へと繋がる尾根を南下、長谷川の流れと出会うところだ。そこには十二柱神社があり、昔は本殿がなく「古代出雲ムラ」の伝承地「ダンノダイラ」の磐座を拝んでいたとする。この「ダンノダイラ」が巻向山から三輪山へと繋がる尾根にある。現段階で、筆者は「ダンノダイラ」と「弓月が嶽」が同一なのではないかと考えている。とすると、応仁の乱で焼失してしまった穴師兵主神社が「ダンノダイラ」にあったことになり、秦氏の居住地であった可能性がでてくる。野見宿禰が秦氏の系譜にあることになり、ともに兵主を祀っていたことになる。つまり、野見宿禰と河童の別称ひょうすべ（兵主部）の関係がここに見えてくることになる。兵主を祀っていたということから、まさに兵主の部ということになる。

また、この出雲を流れる長谷川には秦河勝の名前の由来に関してとても興味深い逸話が残っている。長谷川は古くは初瀬川といったが、この初瀬川が氾濫した時流れてきた赤ん坊が、後の河勝であるという。『風姿花伝』にそれは記されている[23]。氾濫してもなお、河に勝ったということでその名があるとされている。この逸話が史実だとは思えないが、河勝が秦氏のリーダーとしてあったことを考えると、長谷川流域一帯を秦氏が抑えていたことの可能性は高くなってくる。

Ⅲ　零落する水神

1．相撲節会と七夕の原像

河童と野見宿禰は兵主神を求心点とした関係性の中で強く意識され、伝承の深層に根付いている。河童は相撲を好むが、相撲の元祖として『日本書紀』は野見宿禰を挙げている。「野見宿禰と当麻蹶速の捔力」の記事は、垂仁天皇七年七月七日条に記される。

七月七日の相撲というと、八世紀初頭から十二世紀まで続く相撲節会も当初、七月七日に行われていた。相撲節会とは各地から力士を呼び寄せ、宮中にて相撲をとる天覧相撲のことである。垂仁天皇条での記述は、一世紀前半の出来事として描かれていて、相撲節会は「野見宿禰と当麻蹶速の捔力」を故事として成立している。相撲の起源説話として語られる「野見宿禰と当麻蹶速の捔力」の日付は、明らかに作為的なものと考えられる。垂仁天皇七年七月七日と、あえて「七」を三つ揃えて日付にしており、「野見宿禰と当麻蹶速の捔力」を故事として成立している相撲節会が当初七月七日の行事として始まるのは当然であった。

七二〇年に完成している『日本書紀』と相撲節会はそもそも同時期の成立なので、相撲節会開催の構想に際し、『日本書紀』の編纂段階で意図的に日付を七月七日にしたとも考えられる。どうして七月七日でなければならなかったのか。「七月七日」で想起することといえば七夕であるが、相撲節会は成立当初、七夕の詩賦と同日の開催であったのである。やはり七夕

との関係は無視できない。

七夕が成立したのは古代中国においてである。一般的に七夕とは牽牛（彦星）と織女が年に一度七月七日に天の川で出会う日とされ、願い事を短冊に書いて竹に吊るし、川へ流す祭事である。しかし、その原像は現在の七夕のイメージとは様子が異なり、天の川の祭り、つまり水神の祭りであった。牽牛の原像は豊穣を祈念する水神への供犠そのものと考えられ、織女は水神に嫁する女と考えられている。また、牽牛の「牽」とはそもそも犠牲のための生き物という意味から、牽牛を動物供犠の牛そのものだとし、織女の原像については水神に嫁ぐ人身供犠であると考えられている[24]。河童が水神の零落したものであるとすると、もともとは水神だったのであり、水神に対する動物供犠、人身供犠が七夕の原像であるならば、七夕は河童の祭りということになる。河童には牛馬を引きずり込むという性分があり、洪水を鎮めるためや治水工事をするために人柱として女性を犠牲にしてきたという伝承が残っている。

2．七夕の原像とスサノオ

七夕との興味深い類似例として、『記紀』に描かれる「天の岩屋」神話のくだりがある。それはアマテラスが天の岩屋にお隠れになる直接的ともいえそうな理由として描かれている。以下、該当記述の概要を記す。

「スサノオは姉のアマテラスに別れを告げてから根の国へ行こうと思い、アマテラスが治める高天原へと登っていく。アマテラスはスサノオが高天原を奪いに来たのだと考えた。スサノオはアマテラスの疑いを解くため、誓約をしようと言った。二神は天の安河を挟んで誓約を行った。その後、スサノオはアマテラスの神田で、春は種を重ね播きし、あるいは田の畔をこわしたりした。秋はまだら毛の馬を放して田を荒らした。また、アマテラスが新嘗の祭りを行なっておられるときに、部屋に糞をした。またアマテラスが神衣を織るため、機殿におられるとき、まだら毛の馬の皮を逆さに剥いで屋根から落し入れた。アマテラスは大変驚き機織の梭で身体をそこなわれた。アマテラスは天の岩屋に隠れられ、それで国中が暗闇で覆われた。八十万の神たちは相談し、アマテラスを天の岩屋戸から導きだした。その後、罪をスサノオにきせて、たくさんの捧げ物をお供えする罰を負わせた。髪、手足の爪をぬいて罪のあがないをさせ、高天原から追放された。」[25]

まず、スサノオはアマテラスに謀反の意思ありと思われている。そして、誓約の後のスサノオの行為はすべて、豊作を邪魔する行為である。その後、アマテラスを天の岩屋戸から導きだし、罪をスサノオにきせて、髪をぬき、手足の爪をぬき、高天原から追放することで修祓の儀式が行なわれている。つまり、スサノオの存在そのものを追放することで修祓の儀式は完了する。ここで注目したいスサノオの行為とは、機織をするアマテラスのところへ、スサノオが馬の皮を剥いで投げ込む行為である。馬を機屋に投げ込む行為を動物供犠とし、傷ついた機織女の死を人身供犠としてみれば、七夕の原像と酷似しているのがわかる。その直後、アマテラスが天

の岩屋にお隠れになり世界は暗闇と化すのである。ここには、七夕を忌避する考え方が反映されていると考えてもいいであろう。七夕の忌避は、言い換えれば水神の祭祀、水神の忌避となる。

おわりに

七夕は、現在、日本では彦星と織女が一年に一度、天の川で出会うロマンチックな物語として理解され、乞巧奠として女性の針仕事が上手くなるよう祈願するお祭りとなっている。しかし、彦星は牛を引いており、原像としての祭祀の主役は実は彦星ではなく牽牛なのである。牽牛の牽はそもそも供犠としての意味があり、この場合、牛がそれに該当し、もう一つの主役が織女そのものに当たる。牛と織女を供犠とした水神の祭祀、それが七夕の原像なのである。河童には牛馬を川に引きずり込む性分がある。動物供犠を求めることが、水神が零落して河童になった後も残ってしまっているのであろう。一方の人身犠牲についてはどうなのか。尻子玉を抜くという性分を人身供犠として考えてもよい。また、『日本書紀』仁徳天皇十一年には河泊が人身供犠として求めるが失敗に終わる話も記述されている。しかし、ここは人身供犠が織女であることにこだわりたい。中国四世紀東晋時代に書かれたとされる『搜神記』巻一四には次のような話がある。

その昔、ある男が娘と飼い馬を置いて遠くに旅に出る事になった。しばらく経っても父親が帰ってこない事を心配した娘は馬に向かって「もし、お前が父上を連れて帰ったら、私は あなたのお嫁さんになりましょう」と言った。すると、馬は家を飛び出し、父親を探し当てて連れ帰ってきた。馬の様子がおかしい事に気付いた父親が娘に問いただしたところ、事情を知って激怒した父親は馬を殺し、皮を剥いだ。娘は馬の皮を蹴りながら「動物の分際で人間を妻にしようなどと考えるから、このような目にあうのよ」と嘲笑した。すると、そのまま皮全体で娘の全身を覆いつくした。父親が必死に探したものの、娘ごと一匹の蚕になってしまった。

この説話は東北地方で蚕の神として知られるおしら様誕生譚と類似している。その話は以下の通りだ。

昔、ある農家に娘がおり、家の飼い馬と仲が良く、ついには夫婦になってしまった。娘の父親は怒り、馬を殺して木に吊り下げた。娘は馬の死を知り、すがりついて泣いた。すると父はさらに怒り、馬の首をはねた。すかさず娘が馬の首に飛び乗ると、そのまま空へ昇り、おしら様となり、養蚕を伝えたという。

東北における養蚕起源説話のモチーフは中国より伝わったものだと考えられる。当然のことながら養蚕は絹織物のためであり、二つの説話に共通しているのは、馬の死と娘の死によって両者が一体化することが養蚕つまり絹織の始まりになると語っていることである。日本では七夕を棚機ともいう。そもそも織女の登場が養蚕との関係を物語ってもいる。

養蚕起源説話のモチーフとスサノオの乱暴におけるモチーフが同じであり、それが忌み嫌われる行為として描かれているのは、律令国家建設のため、それまでの大陸からの影響を排除していく目的ではなかったかと考える。『日本書紀』

では養蚕起源については別の神話が用意され、中国由来の説話はケガレとみなされているのである。

しかしながら、河童伝承がさまざまな形で残されていて、それがたとえケガレとみなされていたとしても、そこにリアリティを感じ、生活を維持する根拠としていたことは確かなことだと思われる。

【注釈及び参考文献】

(1) 網野善彦『異形の王権』平凡社、一九九一年、四九頁。

(2) 稲垣正浩「霊力と呪薬の力で闘う「すもう」の世界（真島一郎）に触発されて」『スホートロジー』三号、みやび出版、二〇一五年、三六～三七頁。

(3) 佐伯有清『牛と古代人の生活』至文堂、一九六七年、一三七頁。

(4) 宇治谷孟『日本書紀（下）』講談社学術文庫、一九九三年、第一二刷、一三七頁。

(5) 宇治谷孟『続日本紀』講談社学術文庫、二〇〇三年、第一六刷四〇八頁。

(6) 神道大系編纂会『神道大系古典編五古語拾遺附註釈』精興社、一九八六年、三五五頁。

(7) 「どば」と読む。埴輪と区別してこの名で呼ばれる。大和型土馬は平城京跡、京都長岡京跡とその周辺に限られ出土量も多い。（田中琢　佐原真編集代表、『日本考古学事典』、三省堂、二〇〇二年五月一五日初版。）

(8) 多田一臣校注『日本霊異記　中』ちくま学芸文庫、一九九七年、六〇頁。

(9) 佐伯有清「八・九世紀の交における民間信仰の史的考察 ―殺牛祭神をめぐって―」『歴史学研究』二二四号、一九五八年。

(10) 下出積與『日本古代の神祇と道教』吉川弘文館、一九七四年、一三四頁。

(11) 上田正昭編集『神々の祭祀と伝承』、「殺牛馬信仰の考察」、同朋舎出版、一九頁。

(12) 柳田國男『柳田國男全集５』、「山島民譚集」ちくま文庫、一九八九年、第一刷。

(13) 石田英一郎『新版河童駒引考』岩波文庫、一九九七年、第三刷、二四〇頁。

(14) 石川純一郎『新版河童の世界』、時事通信社、一九八九年、七八頁。

(15) 前田憲二『渡来の祭り渡来の芸能』岩波書店、二〇〇三年、四七頁。

(16) 本稿では、毛利龍一「河童をヒョウスベと謂うこと」『郷土研究　第二冊』、名著出版、昭和五〇年の論考を中心に扱っているので、その論考で引用されている文を要約している。

(17) 毛利龍一「河童をヒョウスベと謂うこと」『郷土研究　第二冊』、名著出版、昭和五〇年、四一三頁。

(18) 宇治谷孟『日本書紀（上）全現代語訳』、講談社学術文庫、一九九四年、一四一頁に記載される現代語訳を参考に要約した。
(19) 宇治谷孟『日本書紀（下）全現代語訳』講談社学術文庫、一九九三年、一五一頁に記載される現代語訳を参考に要約した。
(20) 千田　前掲書　一一二頁。
(21) 千田　前掲書　一一五頁。
(22) 千田稔『鬼神への鎮魂歌』学習研究社、一九九〇年、一一六頁。
(23) 世阿弥『風姿花伝』岩波文庫、一九八八年、六三頁。
(24) 中村喬『中国の年中行事』、平凡社、一九八八年、一六三～一六九頁。
(25) 宇治谷孟『日本書紀（上）全現代語訳』、講談社学術文庫、一九九四年、三四～四三頁に記載される現代語訳を参考に要約した。

Exploring a reality of Kappa
- what lies beneath sumo-loving of Kappa-

TAKEMURA Masaya

During the Meiji Period, there was a philosopher named Enryo Inoue, who was known as a doctor of specter. He established a school called 'tetsugakukan' which was the precursor of Toyo University and he taught a course in spectrology. He had carried out a detailed study as a doctor of specter of a different type of specters and its phenomenon.

We may expect that Inoue had difinitely given a favorable review on a specter being since he had earnestly carried out a study. However Inoue had concluded that a specter being and a deal of superstition around a specter would distance people from the attainment of the truth. Rather, Inoue gave particular attention in promoting scientific analysis of unnatural phenomenon around a specter.

Meanwhile, Inoue had widen his sphere of knowledge in terms of results and authored several books such as "Yokaigaku" and "Yokaigaku-kogi".

In the Meiji Period, Inoue had tried to root out many of its unnatural and opaque phenomenon and a deal of superstition since Japan was facing an age of modern.

However, it was hard to say his attempt was successful. Kunio Yanagida had taken over its productive research and had put a critical opinion to Inoue by using a term 'a folk belief' rather than 'superstitions'. Yanagida's study was emphasized on the mind condition of which they believe a specter being and a deal of superstition around a specter. It may be called a 'reality'.

In exploring some phenomenon and one's experience in an analogous pattern, we are sometimes seized by a sudden temptation to draw causal inference which is far from it's scientific analysis, it is especially so given that they happen in a different time and place with something a little out of the ordinary.To concluede that it is not worthy of belief because of a lack of its scientific foundation is a sophistical argument. Once we have relished the texture of its experience into our body, it lingers at the back of our mind and body. We cannot deny the fact that unnatural and opaque phenomenon and a deal of superstiton which lack of scientific phenomenon has produced traditional folkways by being a reality of a phenomenon and a linger. To exploring a reality of Kappa particulary through the position of a specter being and its folways is the main purpose of this study.

Kappa is filled with a variety of character portraits. Pulling cattles deep under water, bestowing wealth, teaching the secret of arcanum, Kappa likes cucumbers and hate iron and Buddhism. Kappa always waits for a chance of Sumo. Kappa pulls humans under water and pick their ‘shirikodama’ and ‘kimo’.‘Shirikodama ’ is the ball imagined to be around the anus of humans. It is also said that the one who got out of the trouble sometimes became insane after seeing Kappa.

Kappa also tends to be lured into fire. As stated above, these are a variety of character portraits of Kappa. Pulling cattles deep under water is estimated to be ‘amagoi’ and waiting for a chance of Sumo is for praying fertility. This study also mentions ‘God of water’ was ruined into Kappa in order to maintain the authority, and it led to create discrimination among people.